以下の追悼文は共同通信社から配信され、２０２０年の１２月末に、北海道新聞、岩手日報、河北（かほく）新報、下野（しもつけ）新聞、信濃毎日新聞、新潟日報、徳島新聞、愛媛（えひめ）新聞などに掲載されました。以下に全文を載せます。

実際の記事は写真付きですが、写真には著作権がありますので、文章のみです。

守りと開拓、おおらかな芸

一龍斎貞水さんを悼む

長田衛（おさだ・まもる）（演芸研究家）

雨あられ
雪や氷とへだつれど
落つれば同じ谷川の水

一休道歌を基にしたと思われる歌を、一龍斎貞水（いちりゅうさい・ていすい）は高座で好んで語った。講談界初の人間国宝は１２月３日に肺がんによる肺炎で逝去、８１歳。講談一筋６５年、１１月２５日に自身主催の会で口演したばかりだった。

講談は釈台という机を張り扇でたたき、調子を取って、武勇伝、敵討ちや政談などを語る伝統話芸で、明治の頃まで人気を誇った。１０代半ばでこの道に入った当時、明治時代からの古老・邑井貞吉（むらい・ていきち）らが健在で、じかに学び、講談の神髄を肌で吸収した。

講談が振るわない中、貞水は「守るべきものと開拓すべきものがある」が持論だった。

古格を守り、大きな張りのある声で英雄豪傑の逸話を語り、盗賊の悪行を述べ、勧善懲悪を説き、人が抱える心の闇の深さも観客の胸に刻んだ。

息を継がず豪放にとうとうと語る「修羅場読み」が講談の特徴で、貞水はその手本だった。物語の面白さを肉体化し、現代のエンターテインメントにしてみせた。代表作は「鉢の木」「赤穂義士本伝」「雲霧五人男（くもきりごにんおとこ）」「緑林五漢録（みどりのはやしごかんろく）」など。

立体講談として「四谷怪談」では大道具、照明や音楽を効果的に用い「怪談の貞水」と異名を取った。

マクラで自身の光頭をネタにするユーモアと稚気。重厚さと軽快さを交え、３０分の予定が１時間の長講に及んでも苦にならない、おおらかな名人芸だった。鍛え込んだ技と独自のセンスで初めての観客にも親しまれた。

人間国宝に認定されて１８年、講談協会の会長として普及・発展に寄与し、後進を育成した功績は大きい。講談「伝承の会」という、所属組織や東京・大阪の枠を超え、若手が教えを請いたい先輩から稽古を受け、その演目を発表する画期的な催しを実現した。

講談師の数はただ今、東京、大阪で約１００人。いまをときめく麒麟児（きりんじ）・神田伯山（かんだ・はくざん）も組織は違うが、貞水から影響を受けている。講談界は復興の兆しを見せ、若いファンが増大。歴史の大河の一滴になられたが、多くの言葉、映像や音源を残し、貞水講談の源流は脈々と受け継がれる。

記事には、おさだ・まもるの略歴も載っています。
「１９５２年、宮城県生まれ。雑誌編集者を経て、演芸研究、評論。著書に
「浪曲定席　木馬亭よ、永遠なれ」。「大研究　落語と講談の図鑑」制作協力」
とあります。